

フィリピンの 田舎町にて

吉田 友好

南国のリゾート地として知られ多くの日本人が訪れるセブ島は、最近、英会話の留学先としても脚光を浴びています。私も3か月ほどセブ市内の語学学校で学びましたが、英語を母国語とする教師よりも英語を外国語として学んだフィリピン教師の方が、自ら苦勞した発音の練習方法などを伝授してくれ、初級者の私はとても解り易く学ぶことができました。留学費用が安く、教え方が上手、こうした理由からセブ島の英語留学人気が高まっているのでしょう。

この大都会セブ市から車で2時間半ほど南へ行つたところにアルガオという田舎町があります。ここには高級リゾートホテルや高層ビルはありませんが、治安は良く、海あり山ありの穏やかなまちです。人口は約7万2千人ですが面積は約191㎢もあり、大阪市の約225㎢より少し狭いぐらいですが人口と比べてその広さに驚きます。この町の大半は山岳地帯で、岩場や斜面

ばかりの土地は林業にも農業にも適さなく、住民の大半は厳しい暮らしを余儀なくされています。山岳地帯で暮らす人々は、お米以外にもバナナやイモを主食にし、決して豊かな生活ではありませんがお互いに助け合って暮らしています。しかし、現金収入が乏しいので、衣類や学用品などを十分に満たすことができないのが現状です。穴があいたTシャツや擦り切れたズボンをはいた人を普通に見かけます。

教育は未来への投資

小学校ではノートを買えず、先生から貰った1枚の紙を机の上に置き、授業を受けている子どもやすべての科目を1冊のノートに書き込む子どももいます。

両親が炭鉱で働いていて小学生の子どもに妹や弟の世話をさせるため学校に通わせない親がいるとか、文房具を買うことができないので学校に行かせない親もいると先生が話してくれました。教育はその国にとって最も大切な未来への投資です。学校に通えない子どもが一人でも少なくなるように、そして裕福な家庭の子どもも貧困家庭の子どもも、できるだけ同じ教育環境で勉強ができるよう願っています。

子どもたちに贈り物

去年は山岳地帯の10小学校の全児童にノートや鉛筆、クレヨンなどの文房

具セットとバスケットボールやバレーボール、バドミントンセットなどを寄贈しました。文房具セットは私から子どもたちひとり一人に手渡してプレゼントしました。子どもたちの笑顔とありがとうの言葉が、私の活動のエネルギー源となっています。

幸せをくれる人々

文房具の寄贈に際しては学年ごとの人数や文房具の種類、搬入や寄贈式の日程などを打ち合わせするため、何度も学校を訪問します。お昼になると食事を提供してくれます。中でも蒸しバナナは最高の味です。日本にあるバナナと違い、太くて短くモチモチしたバナナで、これを蒸すと甘くて柔らかいサツマイモのようになり何本も食べてしまいます。セブにはスナックという呼び名のおやつタイムが午前と午後があり、パンや焼きそば、サツマイモなどを食べます。家庭によっては夜にもスナックタイムがあるとのことと、とにかく食べるのが大好きな人たちです。

学校の休憩時間になると子どもたちが私に駆け寄ってきてプレスをしてくれます。プレスは年上の人に敬意を表わすしぐさで、私の手を取り少しおじぎをしなが、自分の額に私の手の甲を押し当てるしぐさです。100人ほどの子どもが私の右手を奪い合いながらプレスをしてくれます。私がとても幸せを感じる時です。

高齢者に敬意を払い、貧しくても困った人には手を差し伸べる心豊かな人々に接して、日本にないもの、なくなつたものを感じる事が多くあります。



DamGO 現地のピサヤ語で「夢」という意味